

歌右衛門の蝶圖



歌右衛門の疎閑

山川静夫



歌右衛門の疎開

一九八〇年二月五日第一刷

定価 一二〇〇円

著者 山川静夫

発行者 半藤一利

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―二二一

印刷 精興社
製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁がありましたらお取替えします

歌右衛門の疎開
目次

湯田中の羽左衛門	9
車の中の団十郎	20
歌右衛門の疎開	33
声色仕掛人	44
松緑の初飛行	57
晩年の勘弥	68

二人鯉三郎

80

劇しき人

93

幕と共に去りぬ

103

大向うの人々

115

わが声色修業

127

とにあれ六代十五代

138

久米さんの野球事始

151

伊四郎地蔵

164

酔いどれ月皎

177

志寿太夫一夜咄

189

証誠寺の与三郎

199

お初と尾上の点と線

209

ある義太夫の会

221

あんつるさんのふるさと

233

弥七の死

244

あとがき

263

装幀
梶山俊夫

歌右衛門の疎開

湯田中の羽左衛門

北信濃の飯山市で仕事があつて、その日のうちにトンボ返りするはずだったが、十五世羽左衛門が死んだ湯田中温泉がすぐ近くであることを思い出した。

たしか、羽左が逝つた昭和二十年当時の旅館も部屋もそっくり残っていると聞いていたので地元の人に調べてもらうと、「よろづや」という宿で、羽左の最後を看取ったゆかりの人も何人か居るという。私は直ちに予定を変えて湯田中へと車を走らせた。

晴れていれば白根山が正面に見えるはずだが、あいにく煙っている。そのむこうは草津だ。車はリンゴ畑をぬうようにして幾つかの村落を過ぎ、志賀高原の山すそに入ってしまった。

「よろづや」では、先代の長女栄子さんが出迎えてくれた。

「羽左衛門さんが亡くなったお部屋は三十四年前とほとんど変えておりませんのよ。その菊の間へ今夜お泊りのお客様が間もなくお着きになりますから、早速御案内させていただきます。急がせてすみませーん」

四十五、六に見える年格好の栄子さんは女学生のような若々しい物言いでそう説明すると、もう先に立って歩き出している。

玄関やロビーは近代的なホテル風だが、奥へ行くにしたがって和風建築のおもむきが色濃くなってゆく。

「羽左衛門さんのお部屋をそのまま保存したいばかりに、旧館を残して増築したものですから、まるで迷路のようなんですの」

くねくねと廊下をたどって、もうすぐですからの励ましに胸つき八丁の階段を登りつめると、あっと声をあげたくなるほどの、磨きぬかれた檜の柱をかまえた格子戸の玄関が目の前にあった。

カラカラと軽い音を立てて戸をひきあける。入ったとっつきの三畳の左手が洩柿亭ひょうしつていという茶室、三畳の向う東側は襖をへだてて、四畳半に古い鏡台が一つ、更に一段上げて鹿鳴館時代を思わせるベッドが置かれた洋間が続く。そして、入口の三畳からも四畳半からも踏みこめる南側に十畳ほどの座敷菊の間があった。

「ここですね、羽左衛門は……」

私は息をつめてゆっくりと座敷を見廻した。南側と東側が中窓になっており、西側は書院の床の間で、床の掛物や置物は違っているが、座敷中央に置かれた津軽塗りのテーブルは重々しく、純和風の部屋のつくりや調度品がいかに羽左衛門の終焉にふさわしく思え、私は安堵の息をついた。

波柿亭や洋間のある北側は、屋根に接するほどに岩場がせまっている。戦時中のこととて爆発物のハッパが一度には買えず、いちいち役場から許可をもらっては、一回二百三十円かけて岩場を切りひらき、ようやくこの家を建てたんです、といいながら栄子さんは南側の窓をあけた。

「羽左衛門さんが亡くなった日は、この窓の外の染井吉野が満開でしたね、その桜の花びらが風によって部屋に舞いこんで羽左衛門さんのなきがらの上にハラハラとふりかかったんですよ」

「まさに羽左衛門は花道を逝ったんですね」

昭和二十年五月六日午後零時二十分、この温泉宿で息をひきとった十五世市村羽左衛門……その死を報じた新聞記事のなんと小さかったことか……。日本が総力をあげて戦っていたさなかとあっては、新聞社としても、名優とはいえ歌舞伎役者の死など丁寧にあつまっているひま

はなかった。いや、羽左衛門なればこそ、猫のひたいほどでも訃報欄に紙面をさいたと言うべきかも知れぬ。

それにしても羽左衛門はこの長野の湯田中でどのような暮しをしていたのだろうか……戦中戦後の混乱の中に埋没して忘れられようとしている十五代目の死を、私はもう一度掘り起してみなかった。

夕闇がせまるころ、栄子さんや、今もかくしゃくとした母堂の松枝さんから、名優最後の日をうかがうことが出来た。

羽左衛門が湯田中へ疎開してきたのは昭和二十年三月五日のことである。二月十五日に演舞場で「盛綱」を演じたあと、次第に空襲が激しくなってくるので、七十二歳の羽左衛門も安全策を考えざるを得なくなった。長野県の湯田中をえらんだのは、さして深い理由があったわけではなさそうで、知人の紹介か案内所の情報からか、とに角、妻女とマネージャーの吉見氏の二人を連れて信濃路へわけ入ったのであった。

「よろづや」でも羽左衛門に対する特別の配慮があったわけではない。ごく普通の客並みにあつかったというから、東京では大もての羽左も、ここでは気楽にふるまえたと思われる。ただし宿の人々も、客人のただならぬ美しい容姿にはド肝をぬかれた。

菊の間に旅装をといた一行は、配給通帳を出して三日間逗留の予定だと話した。そして、どこか湯田中でしばらく住まわせてもらえるような適当な家を探してはもらえまいかと主人に頼んだ。

主人の小野博氏は一高から東大法学部へと進んだ秀才で植村甲午郎とは同期であったが、書画骨董にくわしく、法曹界には入らずに家業を継いでからは風流三昧に明け暮れていた人だから、羽左の人柄にたちまちとけこみ快く承知し、すぐに山本とかいう教師の家を世話しようとした。

ところが二日三日と日がつにつれ羽左は、当時の田舎では珍しい水洗便所まで備えたこの菊の間にすっかり惚れこんでしまい、別の家へ移動する気持を萎えさせてしまった。

「ねえ御主人、ここは風呂はいいし便所も清潔だ。あたしが他所へ移っても便所と風呂だけはここを使わしておくれな」

そう言われれば小野氏も悪い気はせず、つきあえばつきあうほどさっぱりとした気性の羽左衛門を他所へやるのは邪険のように思われて、それほど気に入って下すのならしばらくお住まいなさいと、明け渡したのである。

羽左衛門の疎開生活が始まった。朝はゆったりと起き出して九時頃が朝食となる。羽左の日課は大部分がこの宿の主人小野博氏と帳場で話すことに費やされた。帳場には囲炉裏が切っ

あり、それをはさんで二人は世間話に打ち興じた。話がとぎれると、羽左はクルクルッと帯を解いて、その場で裸になり宿の風呂へ行く。かつて一茶が愛した外風呂の大湯は「よろづや」のすぐ前にあり、ふんどし一丁で手拭を頭にのせた湯治客や、裸同然の母子が一枚のねんねこ半纏に昆布巻きになって帰ってゆく姿がざらに見られたものだが、羽左は大衆の目に細く白い素肌をさらすのを避けたのか、大湯へは出向かず、もっぱら内湯ですませた。

菊の間で昼食をすませると、午後もまた羽左は帳場にやってくる。

「何を話していたんでしょうか、主人が生きていればお話出来ましたのに数年前にこの世を去りましてねえ。主人と羽左衛門さんは合性がいいというのか飽きることなく本当に楽しそうに話しこんでいました。時たまサツマイモを囲炉裏で焼いてあげたりお汁粉などもこしらえて差し上げましたが、どちらかというと甘党でいらっしゃるようで、とてもお喜びになりました。お部屋ではもっぱらラジオばかりお楽しみだったようです」

松枝さんは帳場の羽左をなつかしむ。その当時まだ女学生だった栄子さんも、昔の建物は、帳場からピカピカに磨きぬいた長い廊下が奥へのびていて、そこをいかにも二枚目らしく、後の裾をたっぷり長くして前は持ちあげるほど棲高に着物を着て歩いていくあの方の形のよささらなかったわッ、と目を輝かす。

散歩にもよく出掛けた。田舎ではめったにお目にかかれぬ洒落れたニッカーズボンに小粋な